

## 『諸大事十結』「邪気等加持作法」における五蔵曼荼羅の意義

---

亀山隆彦（本センター国際研究部門リサーチ・アシスタント）

### 【要旨】

はじめに五蔵曼荼羅がいかなる教理か簡単に説明しておく、肝肺心腎脾のいわゆる五臓を中心に、五方、五仏、五智、五輪、五色、さらに五行や五味も含む多種多様な「五部の法門」相互の対応を表現した日本密教に独自の曼荼羅思想である。頼富本宏氏によれば、「ほとけに象徴される大宇宙と五臓六腑から構成される身体小宇宙の相似を意図」しているという。このように人間の身体に直接関わる教理であり、また古代中国のそれとはいえ医学の知識も踏まえた五蔵曼荼羅に、中・近世期の真言僧は、はたして何の医療の機能も期待しなかったのか。たとえば彼らの庇護者である天皇や貴族が内臓に病を患った際に、五蔵曼荼羅の功德を活用してそれを治癒しようとは考えなかったのだろうか。本稿では、江戸初頭期の真言僧、隆誉が編集した『諸大事十結』第四結に収録される「邪気等加持作法」と呼ばれる密教儀礼の検討を通じて、この疑問に答えたい。結論からいえば、五蔵曼荼羅を中核に据えた治病のための密教儀礼は、近世の真言僧にとって「大事」の一つとみなされていた。

キーワード：五蔵曼荼羅、『諸大事十結』、「邪気等加持作法」、隆誉

## 『諸大事十結』「邪気等加持作法」における五蔵曼荼羅の意義

亀山隆彦

### 序論

今から5年前の2011年6月18日に、日本イタリア会館京都本校で行われたコロンビア大学日本宗教センター（The Columbia Center for Japanese Religion）主催のカンファレンスにおいて、筆者は日本のとある密教教理の思想基盤について研究発表を行った。発表の主題となった密教教理とは、すなわち『五蔵曼荼羅』『五蔵曼陀羅和会釈』そして『五輪九字明秘密釈』といった文献を通じて流布された五蔵曼荼羅である。<sup>1</sup>

五蔵曼荼羅がいかなる教理かここで簡単に説明しておく、肝肺心腎脾のいわゆる五臓を中心に、五方、五仏、五智、五輪、五色、さらに五行や五味も含む多種多様な「五部の法門」相互の対応を表現した日本密教に独自の曼荼羅思想である。頼富本宏氏によれば、「ほとけに象徴される大宇宙と五臓六腑から構成される身体小宇宙の相似を意図」しているという。<sup>2</sup> このような五蔵曼荼羅は、平安末期の真言僧、覚鑊（1085～1144）が著した『五輪九字明秘密釈』（以下『五輪九字秘釈』）では五蔵三摩地観と呼ばれる密教瞑想法の観想対象とされ、またその観想に習熟した修行者なら、現在の肉身に速やかに五仏の五智を獲得することも自由自在と説かれる。この『五輪九字秘釈』中の五蔵曼荼羅に関する記述と、同じく覚鑊が著した『《vam》字密観』をはじめとするいくつかの聖教の教説を比較し、前者が後者を踏まえている可能性を指摘するというのが、カンファレンスにおける筆者の発表であった。発表後、その覚鑊と『五輪九字秘釈』、そして五蔵曼荼羅について様々な質問が寄せられたが、中に同曼荼羅思想の社会的な意義に関わる次のような問いがあった。

五蔵曼荼羅に関する覚鑊『五輪九字秘釈』の主張を要約すれば、概ね上記の通りだが、同じく『五輪九字秘釈』ではこれら主張をさらに敷衍するにあたり、密教經典および儀軌類だけでなく『黄帝内経素問』や『黄帝内経太素』といった中国医学書の学説にも触れる。<sup>3</sup> 改めて確認するまでもないかも知れないが、触れられるのは五臓六腑の生理に関する学説である。つまり密教の教理や儀礼だけではなく、古代中国医学の身体および内臓観もまた、『五輪九字秘釈』に説かれる五蔵曼荼羅の重要な構成要素であった。であれば、そこから以下のような疑問が生じてくる。人間の身体に直接関わる教理であり、また古代中国のそれとはいえ医学の知識も踏まえた五蔵曼荼羅に、中・近世期の真言僧は何の医療の機能も期待しなかったのか。たとえば彼らの庇護者である天皇や貴族が内臓に病を患った際に、五蔵曼荼羅の功德を活用してそれを治癒しようとは考えなかったのだろうか。発表後、聴衆の一人からこのような質問が投げかけられた。

それに対して筆者がどのように回答したかといえば、残念ながら正確なところは失念し

てしまったのだが、当時は五蔵曼荼羅に関する考察を始めたばかりで、また質疑応答が英語で行われたことも相まって、明快な応答が出来なかったことだけははっきり覚えている。おそらく、未だ検討が及んでいない資料も多々残されており、現時点ではあったとも無かったとも断言出来ないと答えるしか出来なかったのではないかと思う。つまるところ、カンファレンスで発せられた上記の質問に 5 年越しに回答を試みるのが、本稿の主たる目的である。

さて『五輪九字秘釈』『五蔵曼荼羅』といった文献を通じて流布した五蔵曼荼羅に、中世ないし近世の真言僧が、広い意味で何らかの医療機能を期待していたかどうか、さらに進んで、実際の病氣平癒に五蔵曼荼羅の力を活用したかどうかという点、現時点では次のように答えられる。いかなる頻度でそれが実修されていたかは不明だが、五蔵曼荼羅を中核に据えた治病のための密教儀礼は、近世の真言僧にとって「大事」の一つであり、それに関するマニュアルも真言宗の中で連綿と伝えられていた。すなわち江戸初頭期の真言僧、隆誉（1653～1711）が編集した『諸大事十結』（以下『十結』）の第四結に、「邪気等加持作法」と呼ばれる密教儀礼のマニュアルが収録される。『密教大辞典』にも明らかにされるように、この「邪気等加持作法」は「病者の五臓に五仏五大尊の種三尊転成を觀じ」「病者の魔障を加持して対治する法」、まさしく病人の肝肺心腎脾の五臓を五蔵曼荼羅と觀じ、その病を癒すという密教儀礼であった。<sup>4</sup> 以下、本稿では『諸大事十結』に収録される「邪気等加持作法」の詳細を明らかにし、先に言及した質問への回答とする。

## 1. 『十結』と隆誉について

先述した通り、本稿では隆誉編『十結』に収録される「邪気等加持作法」の内容を検討し、五蔵曼荼羅の觀想によって病を癒す行為が、近世期の真言僧にとって加持祈祷の「大事」であったことを明らかにする。その具体的な検討は次章からはじめるとして、先ず本章において『十結』という文献の基本的な性格、および編者と伝えられる隆誉の経歴を先行研究の記述を通じて確認しておきたい。はじめに『十結』の基本的な性格であるが、『密教大辞典』（以下『辞典』）に次のような解説が掲載される。

十結、智山学侶隆誉輯。諸大事・諸切紙等と名く。十括ある故に十結と称するに至れり。徳川期に最も用いられたる諸大事を輯めたるものにて、玉石混淆の嫌あれども、加持祈祷等に多く用ひらるゝに至る。別に豊山勝海房章如輯と伝ふる五十通ありて豊山派に多く之を用ふるに對し、十結は智山派に於て特に多く之を用ふ。<sup>5</sup>

引用文によると、江戸時代の真言僧が重用した「加持祈祷等」の「諸大事」、各種口伝の教えを集成したものが、すなわち『十結』である。繰り返し述べるように本書を編んだのは同時代の新義真言宗智山派の学侶、隆誉で、また十の括りから構成されることから『十結』と呼ばれるのだという。これも先述したことだが、この『十結』の第四結に「邪気等

加持作法」が収録される。加えて編者である隆誉が新義真言宗智山派に所属していたことから、『十結』は特に同宗派で重用されたと『辞典』には解説される。

京都六波羅蜜寺の学僧。字は慈蓮房、姓実詳ならず。元禄の頃山科妙智院並に六波羅蜜寺に住し、釈迦院大僧正の法を受け、智山に於ける事相の達匠として令名高し。正徳元年正月二日寂す。寿五十九。<sup>6</sup>

次に『十結』の編者、隆誉の経歴である。同じく『辞典』によれば、隆誉は元禄時代に山科妙智院および六波羅蜜寺に住んだ新義真言宗智山派の学僧で、特に密教の事相の達者として著名であった。本稿で取り上げる『十結』以外にも、『要法授決鈔』二卷、『金胎略次第』二卷、『金胎秘密伝法灌頂口決集』三卷等の著作を残している。<sup>7</sup> また布施浄明氏編著『平成版真言祈祷大系Ⅰ 諸大事十結』（以下『祈祷大系』）によれば『諸大事口決』二巻という文献は、『十結』に関する隆誉自身の「口決」である。<sup>8</sup>

## 2. 「邪気等加持作法」と五蔵曼荼羅

以上、『十結』の基本的な性格と隆誉の経歴を確認した。引き続き「邪気等加持作法」における五蔵曼荼羅のそもそもの意義を、同じく先行研究の記述に基づき考えてみたい。具体的には『辞典』『祈祷大系』の記述を検討し、五蔵曼荼羅の観想こそが「邪気等加持作法」の中核とみなしうることを指摘する。はじめに『辞典』であるが、「邪気加持」の項に以下のような解説が掲載される。

病者の魔障を加持して対治する法。先づ護身法、次に法界定印を結びて、行者は現成の大日尊、病者は未成の金薩と観じ、次に病者の五臓に五仏五大尊の種三尊転成を観じ、五仏は五智の光を放ちて邪気悪霊一切の迷暗を照し、五大尊は各器杖を執りて諸難諸障を断除すと観想す。次に仏眼の印明にて五仏五大尊の慧眼を開き、金大日の印明にて五智四身の総体を円満せしめ、五大尊の総印にてその別徳を備足せしめ、次に五股杵を持して慈救咒を唱へ、逆順各百遍加持し、後地結・四方結等を以て結界し、後に六字観音印咒・灌頂印明等を結誦す。<sup>9</sup>

引用文によれば「邪気加持」とは、病人の「魔障」を「加持」し「対治」する法であり、その中には次のような手順が含まれる。すなわち病人の体に巣くう「魔障」を「対治」するにあたり、真言行者は病人の五臓に「五仏五大尊」の「種三尊転成」、つまり五仏・五大明王の種子真言から三昧耶形、三昧耶形から尊形への変転を観じ、さらに、そうして現れた五仏の五智の光明があらゆる「邪気」「悪霊」を照らし、五大明王が自らの「器杖」でもって「諸難」「諸障」を取り除く様を観想しなければならない。言い換えれば「邪気加持」には、五臓、五仏、五大明王等「五部の法門」の相応、すなわち五蔵曼荼羅を観想する行

為が、手順の一つとして組み込まれている。このような『辞典』の記述を踏まえ、続いて『祈祷大系』には次のように述べられる。

この法（※「邪氣等加持作法」）は第四結（※『十結』第四結）所収のもので（中略）病者の<sup>(ママ)</sup>摩障を加持して退治する法である。『口決』に「この法病人の五臓を五仏五大尊と観ずる故、邪氣障碍し留難することあたわざるなり」とある。五臓を五仏に配することは『五輪九字明秘密釈』に出す善無畏三蔵の説と同一である。<sup>10</sup>

本文は「邪氣等加持作法」に関する『祈祷大系』の解説の一部である。注目すべきは、解説のなか引用される『口決』の文で、それによると「邪氣等加持作法」とは、病人の五臓を五仏および五大明王と観じることであり、それにより、いかなる「邪氣」「障碍」も病人の身中に留まることはかなわなくなるといふ。見方を変えれば、五藏曼荼羅の観想が「邪氣等加持作法」の中心要素とみなされていると指摘出来る。『十結』にはいくつか写本が伝えられるが、その中には、上記の『口決』の文を第四結「邪氣等加持作法」の冒頭に据えるものも存在する。<sup>11</sup> その点からも、この記述が持つ意義は極めて大きいと推定される。

### 3. 『十結』『邪氣等加持作法』における五藏曼荼羅

このように「邪氣等加持作法」には、五藏曼荼羅の観想が手順の一つとして組み込まれており、しかもその観想は「邪氣等加持作法」の中心的な要素とみなされる。この点を踏まえて、五藏曼荼羅に関する『十結』『邪氣等加持作法』の実際の記述がどのようなものか、最後に確認しておく。はじめに「邪氣等加持作法」の全貌を把握するために、同法を構成する手順のすべてを以下に列挙しておく。『十結』によれば「邪氣等加持作法」は、次の十種の手順から構成される。<sup>12</sup>

- ①従来の修法のごとく護身のための各種印明を結誦し、作法に入る準備をする。
- ②護身法がすめば、施主である病人の前に安座して法界定印を結び、自らの胸に《vam》字を観想する。<sup>13</sup>
- ③続けて施主＝病人の胸中に《hūm》字を観想し、真言僧自身を「現成」の大日如来、「施主」を「未成」の金剛薩埵と観じる。
- ④施主を「未成」の金剛薩埵と観じ終わったなら、その五臓に後述する九種の種子真言を観じ、それら真言が金剛界の五仏と五大明王の三昧耶形、さらに尊形に変じていく様、そうして現れた五仏の五智の光があらゆる邪氣・悪霊を照らし、五大明王がその「器杖」でもって「諸難」「諸障」を取り除く様を観想する。
- ⑤仏眼の印明を結誦し、施主の五仏・五大明王の慧眼を開かせる。
- ⑥金剛界の大日如来の印明を結誦し、その場で五仏の五智、および四身のあらゆる徳を円満させる。
- ⑦五大明王の印明を結誦し、それら尊格の別徳を満足させる。

⑧病人を玉女の方に向け、さらに五鈷杵を持ち慈救咒を唱えてその背後から加持し、九穴より邪気・障碍を追い出す。

⑨結界をつくる。

⑩病人に六字観音の印と各種灌頂の印明を授けて、大日如来と同一化させる。

これら十種の手順を踏むことで、施主の身中に潜む邪気を加持し、病を対治する。それが「邪気等加持作法」である。この中④が、五蔵曼荼羅の観想到に該当する。具体的にどのような述べられているかという、次の通りである。

次ニ想ヘ施主ノ肝臓ニ有リ《a》字。変シテ成ル五鈷杵ト。トトト変シテ成ル阿閼尊ト。又有リ《hūm》字。成ル五鈷杵ト。トトト変シテ成ル降三世尊ト。心臓ニ有リ《trāḥ》字。成ル宝珠ト。タタ変シテ成ル宝生尊ト。又有リ《hūm》字。成ル三鈷杵ト。タタタ変シテ成ル軍荼利尊ト。肺臓ニ有リ《hrīḥ》字。成ル紅蓮花ト。タタタ変シテ成ル弥陀尊ト。又有リ《hrīḥ》字。成ル宝棒ト。タタ変シテ成ル大威徳尊ト。腎臓ニ有リ《aḥ》字。変シテ成ル羯磨ト。タタ変シテ成ル釈迦尊ト。又有リ《haḥ》字。変シテ成ル金剛牙ト。タタタ変シテ成ル金剛夜叉ト。脾臓ニ有リ《vaṃ》字。変シテ成ル塔婆ト。タタ変シテ成ル大日如来ト。又有リ《haṃ》字。変シテ成ル利剣ト。タタ変シテ成ル不動尊ト。五仏五大尊ニ各有リ恒沙ノ眷属。前後左右ニ圍繞セリ。<sup>14</sup>

引用文の内容を順に解説していくと、第一に施主の肝肺心腎脾の五臓それぞれの上に、《a》字と《hūm》字、《trāḥ》字と《hūm》字、《hrīḥ》字、《aḥ》字と《haḥ》字、そして《vaṃ》字と《haṃ》字の計九種の種子真言を観じる。次にそれら九種真言が、下図の通り金剛界五仏と五大明王の三昧耶形、および尊形に変じていく様を観想する。

| 五臓 | 種子真言    | 三昧耶形 | 尊形     |
|----|---------|------|--------|
| 肝臓 | 《a》字    | 五鈷杵  | 阿閼仏    |
|    | 《hūm》字  |      | 降三世明王  |
| 心臓 | 《trāḥ》字 | 宝珠   | 宝生仏    |
|    | 《hūm》字  | 三鈷杵  | 軍荼利明王  |
| 肺臓 | 《hrīḥ》字 | 紅蓮花  | 阿弥陀仏   |
|    |         | 宝棒   | 大威徳明王  |
| 腎臓 | 《aḥ》字   | 羯磨   | 釈迦仏    |
|    | 《haḥ》字  | 金剛牙  | 金剛夜叉明王 |
| 脾臓 | 《vaṃ》字  | 卒塔婆  | 大日如来   |
|    | 《haṃ》字  | 利剣   | 不動明王   |

すなわち、肝臓上の《a》字と《hūm》字が共に五鈷杵に変じ、さらにその五鈷杵が阿閼

仏と降三世明王の尊形に変わる様、心臓上の《trāḥ》字と《hūṃ》字がそれぞれ宝珠と三鈷杵に変わり、さらに宝生仏と軍荼利明王の尊形に変わる様、肺臓上の《hrīḥ》字が紅蓮花と宝棒に変わり、各々、阿弥陀仏と大威徳明王の尊形に変わる様、腎臓上の《aḥ》字と《haḥ》字が羯磨と金剛牙となり、さらに釈迦仏と金剛夜叉明王の尊形に変わる様、そして脾臓の《vaṃ》字と《haṃ》が卒塔婆と利剣に変わり、さらに大日如来と不動明王の尊形に変わる様を観想するのである。また『十結』では以上のように記した後に、次のようにも述べる。

想へ五仏放<sub>テ</sub>五智ノ光<sub>ヲ</sub>照<sub>シ</sub>邪氣悪霊ノ一切ノ迷闇<sub>ヲ</sub>五大尊各執<sub>テ</sub>器杖<sub>ヲ</sub>断<sub>テ</sub>除<sub>ス</sub>諸難諸障<sub>ヲ</sub>。<sup>15</sup>

上記の観想の後、尊形の金剛界五仏と五大明王が、それぞれ「五智の光」と「器杖」をもってあらゆる邪気や悪霊、諸難・諸障を排除すると観じなければならない。

## 結論

最後に、各章の検討結果を今一度まとめておく。

- ①『十結』は、江戸初期の真言僧で、事相の達者として著名であった隆誉の手による加持祈祷の「大事」の集成である。
- ②その『十結』第四結に収録される「邪気等加持作法」には、手順の一つとして五蔵曼荼羅の観想が組み込まれており、あるいはこの五蔵曼荼羅の観想が、「邪気等加持作法」の中心要素ともみなされる。
- ③「邪気等加持作法」に組み込まれた五蔵曼荼羅の観想とは、具体的には、施主の五臓の上に金剛界五仏と五大明王の種子真言、三昧耶形、および尊形の変転を観じることである。

これら検討の結果から、五蔵曼荼羅を中核に据えた治病のための密教儀礼は、近世の真言僧にとって「大事」の一つであったと推定される。それが、5年前のカンファレンスで発せられた質問に対する現時点での回答である。今後は、このような密教儀礼がいかなる過程を経て形成されたのか、その系譜を明らかにしていきたいと考えている。

<sup>1</sup> カンファレンスの正式な名称は“Buddhist Dynamics in East Asian Religions: A Columbia Graduate Student Conference”である。筆者の発表題目は、“Kakuban’s View of the Human Body: The Five-Viscera Visualization in Gorin Kuji Myō Himitsu Shaku”であった。

<sup>2</sup> 頼富本宏「密教の受容した五臓説—胎内納入品と覚鑿の『五輪九字明秘密釈』を中心として—」（『東方宗教』90、1997年、日本道教学会）83頁上段参照。

<sup>3</sup> 田中文雄「『五輪九字秘密』の背景思想に関する一管見—道教・医学の両側面について—」（『豊山教学大

---

会紀要』12、1984年、豊山教学振興会）参照。

<sup>4</sup> 『密教大辞典 縮刷版』（1983年、法蔵館。以下『辞典』）1044頁中段「邪氣加持」の項参照。

<sup>5</sup> 『辞典』858頁中段「十結」の項参照。

<sup>6</sup> 『辞典』2252頁下段「隆誉」の項参照。

<sup>7</sup> 『辞典』「隆誉」の項参照。

<sup>8</sup> 布施浄明氏編著『平成版真言祈祷大系Ⅰ 諸大事十結』（2003年、四季社。以下『祈祷大系』）251頁参照。

<sup>9</sup> 『辞典』「邪氣加持」の項参照。

<sup>10</sup> 『祈祷大系』138頁。

<sup>11</sup> 稲谷祐宣『真言秘密加持集成』（1998年、東方出版）58頁上段参照。

<sup>12</sup> 『祈祷大系』127～139頁参照。

<sup>13</sup> 悉曇については《》中にローマ字化したものを記載し、その形式でもって表記することを基本とする。

<sup>14</sup> 『祈祷大系』124～125頁。

<sup>15</sup> 『祈祷大系』125頁。